『疑心暗鬼（アマチュア）』

プロとアマチュアの違いは、
自然を見方に付けたか、敵にまわしたか。

バリューゴルフ
VALUE GOLF
www.valuegolf.co.jp

笹生優花、全米オープン優勝

USLPGAツアーのメジャー第2戦『全米女子オープンゴルフ選手権』（米ペンシルバニア州ランカスターCC）が、6月2日に大会最終日を終えた。笹生優花が通算4アンダーで優勝を飾り、前回優勝した2021年に続き、史上最年少で全米女子オープンゴルフ選手権2勝目を達成した。

既に、このタイトルを1回獲った笹生だが、スタート前にキャディから、「どんなことが起こっても、君のことを誇りに思うよ」と激励され、緊張がほぐれ、そのメンタルから何か見えない力に後押しされていたと彼女は語った。

3年振りに優勝カップを掲げた表彰式では、前回とは違った貫禄と余裕が見受けられた。「21年の大会では、お母さんへの恩返しでした。今回は、父へ捧げる勝利です」と言った彼女は、試合のときには見せなかった表情で、涙を拭った。今回の優勝でパリオリンピック日本代表へ大きく前進した。

日本人の父とフィリピン人の母を持つ彼女は、日本の国籍法で22歳までに国籍を選択しなければならなかった。ルールに合わせて日本の国籍を選んだが、「どちらを選ぼうと自分は日本人とフィリピン人」と発言しているように、たくましさを感じる。

この全米女子オープンは、10位以内に、渋野日向子、古江彩佳、小祝さくら、竹田麗央という日本の女子プロゴルファーの競い合いでもあった。樋口久子から岡本綾子、そして、宮里藍たちが作った日本女子プロゴルフのステータスは、言うまでもなくその実力を伴って、今や世界の最高峰にある。

古い話だが、『巨人の星』の星飛雄馬（ひゅうま）のように、父一徹から想像を絶するハードトレーニングと、それに伴うメンタルの強さを指導された、いわゆる「スポ根」とは異なる日本の女子プロ選手たちが次々と誕生している。

この半世紀、ゴルフの仕事に携わってきて、私自身もこれほど世界のレベルに追いつくとは予想だにしなかった。しかし、考えてみると、2000年を過ぎてから、メジャーリーガーの大谷翔平やダルビッシュ有、ボクシングの井上尚弥など、世界でも頂点にいるアスリートが続々と誕生している。今回のパリオリンピックでも、他を圧倒するような世界ナンバーワンの選手が現れるのであろう。

一方で、もう一踏ん張りして欲しいのは、日本の男子プロゴルフである。松山英樹が1人で牽引している日本の男子プロであるが、どこかのメジャー大会で何人もの日本人選手が1位を競い合う時代が来ることを願ってしまうのである。

どんなスポーツも、歴史は必ず塗り替えられ、そこに新しいドラマが誕生する。

戸張 捷 Sho Tobari

1945年、東京生まれ。高校からゴルフを始め、3年で全日本ジュニア3位、大学4年で日本アマ9位。住友ゴム工業（現SRIスポーツ）に入社後、株式会社ダンロップスポーツエンタープライズへ出向。トーナメントディレクター、プロデューサーとして日本ゴルフ界に貢献した。現在は、ゴルフキャスターとして活躍するほか、ゴルフトーナメントやイベントのプロデュース、コンサルティングなども手掛けている。